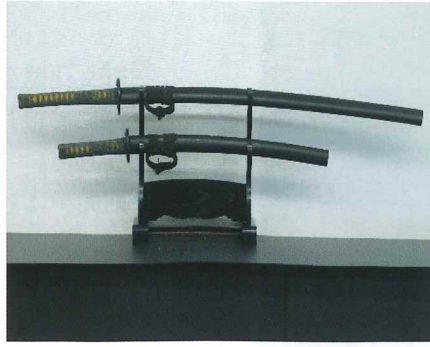


# 日本刀と名倉砥石

令和二年の秋、知人から武田勝頼敗走の険しい山道を案内してくれたお礼にと、国宝指定の太刀二振りについての資料と写真をいただいた。そこには長篠の戦いで有名な奥平信昌が徳川家康より「大般若長光」、織田信長から「長篠一文字」を、戦功の恩賞として与えられた太刀について書かれていた。



日本刀

学変化で現れる刃文は、刀工によって微妙な違いが出るため刀の作者がわかるのである。



日本刀の刃文

日本刀の刃文は、天然砥石でないと美しく出ないため、天然の仕上げ砥は、日本刀を研ぐ最後の砥石と言われている。

この地域で採掘されていた名倉砥は日本刀を研ぐのに最良といわれた砥石の一つで、『三州神田覚え書き』には、正徳三年（一七二三）の『和漢三才図会』（寺島良安著）で次の通り。

刀剣砥 淡白色、參州名倉之産ヲ最上トナシ山州嵯峨野之内曇之二次ク越前常慶寺村之産又之二次ク

また、名倉砥といわれる理由は、南北朝時代清水城主（設楽町西納庫）菜倉左近が、山づたりに狩りに来て、川合山で矢じりを研ぐため石を求めたところ、

山中にこの石を発見して、優良なることを知り、以来名倉砥の名称を冠して賢人に贈り、市価を高めた伝承によるという記述がある。

この砥石は、およそ一五〇〇万年前鳳来寺山周辺の火山活動によって、湖面に降った火山灰が水中に沈みながら、粒の大きさが分かれ、湖底に堆積してきた凝灰岩の一種で、偶然にできた産物といえる。

年が明け令和三年一月、神田の金田先生から名倉砥石について情報をいただいた。設楽町神田の砥石は、卵白色で薄茶色の斑のあるものが多く中砥として利用され、新城市川合で採掘されるのは、白色部分が多くきめの細かい固い仕上砥として利用され、三河白といわれることなどを教えてもらい、一週間ほど調査を試みた。



神田側の露天掘り跡

採掘された場所は、国有林の一ノ又地内で、神田側は町道神田一ノ又線の途中から始まるそ

の林道を、一キロメートルほど進んだ所に分収育林のスギ・ヒノキ林がある。ここから林道の左にある谷沿いの細い山道を五〇〇メートルほど登ると、ノコギリで整形された砥石を背負子で神田集落まで運ぶときに、休憩場所として使われた腰掛石が残されている。さらに凝灰岩や安山岩のガレキが多い山道を、五〇〇メートルほど登ると各所に石積み積まれ、谷の左右に露天掘りの採掘場所がある。



川合側の坑道跡

川合側の採掘場所は鳳来湖の上流にある砥石沢の林道から、凝灰岩や安山岩の多い谷沿いの山道を五〇〇メートルほど登ると、ここにも腰掛石が二ヶ所あった。さらに、五〇〇メートルほど登った谷の右上に、三ヶ所の採掘場所がある。ここでは露天掘りもあるが、深い坑道を掘って採掘されていた。

神田側と川合側の位置は、尾根を挟んで二〇〇メートルほどの近い距離にあって、標高差一

〇メートルほどであることから推測すると同じ地層といえる。このことから良質の砥石の分布は非常に少量であることがわかる。中世の時代から広く知られた名倉砥石であったが、良質の砥石の枯渇や人造砥石の普及によって、神田側は昭和二〇年代に廃業、その後川合側も廃業した。現在の採掘場所には、砥石や食器類の破片が散乱し、当時を偲んでいる。

（設楽町文化財保護審議会委員 加藤 博俊）